

自閉スペクトラム症児に対する音楽療法セッションの振り返り —感覚と運動の高次化理論をもとに—

藤田 琴^{a)}

a 長野医療衛生専門学校 音楽療法士学科

Review of Music Therapy Sessions for a Child with Autism Spectrum Disorder: Based on the Theory of Sensory and Motor Higher-Order Development

Koto Fujita^{a)}

a Nagano Medical Hygiene College

要旨：

本稿では、自閉スペクトラム症 A 児（7 歳男児）への音楽療法の実践を、感覚と運動の高次化理論に基づき振り返る。A 児は感覚刺激の受容と運動表出の結びつきが弱く、発達段階は I 層感覚運動水準が主と考えられたため、初期感覚（前庭覚・固有覚・触覚）を中心に、終点理解およびボディイメージ確立を目的とした活動を行った。約 2 クール（1 クール 8 回）にわたる実践の結果、終点理解の進展、指先操作の向上、視覚刺激の受容時間の延長、他者との関わりが増加が認められた。本事例から、初期感覚を基盤とした音楽療法の有効性と、終点を明確に提示する構造化の重要性が示唆された。

キーワード：自閉スペクトラム症、感覚と運動の高次化理論

1 はじめに

自閉スペクトラム症（Autism Spectrum Disorder: ASD）児の発達支援において、感覚刺激と運動の結びつきの弱さが対人関係や行動の特徴としてしばしば観察される。宇佐川（2012）によれば、感覚と運動の高次化理論において、I 層（初期感覚の段階）にある児童では、外界情報を正確に捉えるための視覚・聴覚が十分に発達しておらず、前庭覚・固有覚・触覚といった初期感覚が主に

用いられており、感覚と運動の統合は未熟である^[1]。さらに池畑（2022）は、物の操作や運動を通じて終点を理解することが知恵の育ちにおける重要な第一歩であると述べている^[2]。本研究では、これらの理論を踏まえ、対象児に対する音楽療法セッションを振り返り、感覚と運動の統合や発達支援における示唆を整理する。

a 長野医療衛生専門学校

〒386-0012 長野県上田市中央 3-8-1

k.fujita@nagano-iryoueisei.ac.jp

2 対象と方法

対象とセッション構造

- A児：7歳男児、自閉スペクトラム症の診断
- 音楽療法開始：20XX年6月
- 実施頻度：2週間～1か月に1回（平均）
- 実施期間：2クール（執筆時点で2クール目7回終了し、計15回）
- 実施時間：1回30分
- セラピスト1名と母親が同席

アセスメントと見立て

（インテークセッションより）

- 楽器・物への接触は良好（タンバリン、デスクベル、ボール等）
- 視覚刺激に対する反応は一瞬のみ
- 物の操作は「投げて終わる」
- 楽器操作では音源定位が可能
- 口での探索行動（服を噛む）あり
- 着席は可能、拒否はなし

→初期感覚刺激の入力が優位であること、瞬間的な目と手の使い方であること、感覚刺激の受容と運動表出の繋がりが弱いことから、A児はI層感覚運動水準にあると推定。

介入方針

1) 目的：終点理解・ボディイメージ確立

2) 方法：

- 音楽を用いた明確な始点・終点の提示
- 初期感覚（前庭覚・固有覚・触覚刺激）の多用
- 即興・既存曲（短く繰り返しのある曲）を組み合わせ、児の好みに沿った選曲

3) 使用楽器・教材：

【楽器】ギター、タンバリン、カバサ、エナジーチャイム、ハンドドラム、オートハープなど

【教材】プットイン、ボール、絵本、手袋シアター、ブランケットブランコ、トランポリン等

3 結果

1 クール目

①初期感覚刺激に対する快反応

特に良い刺激受容反応がみられたものとして、カバサとブランケットブランコがある。カバサは身体に当てる際は身体の部位を入れた歌で歌いかけた。身体に当ててこするとI層の児童に特徴的な体を止めて感覚を受容する姿が多く見られた。自分からカバサに触れ、触覚で受容する場面もあった。またブランケットブランコはブランケットの上に寝転び、両端をセラピストと母とで持ち上げ、左右に揺らす活動で、揺らし始めてすぐに声を出して笑い出すといった快反応が見られた。また身体接触あそびでは圧を加えながら接触すると脱力し穏やかな表情を見せる。

②活動の終わりの理解

活動毎に「終わり」という言葉や終わりを示すジェスチャーを続け、1クール中盤辺りから、セラピストの楽器の片付けを見てから椅子から立ち上がることが増えてきた。また楽器を箱にしまう場面では、箱の蓋が閉じられるまで箱を見続け、箱が目の前から消えると立ち上がる様子がみられた。前述のブランケットブランコでは、歌いかけながら実施し、揺れの終わり頃には歌いかけのテンポを落としカウントダウンをすることで終わりが分かるようにした。この活動によって「もう1回やりたい」という思いを引き出すことができ、またそれを手で表すこともできるようになった。

③投げる行動が減少

教材を使用した活動において、プットインはA児が積極的に取り組める活動であった。初めは容器に入れる積み木を手にとると投げる様子があったが、手首で押し入れるように支援（固有感覚刺激）すると、刺激をじっと受け止め、笑顔や「もう1回」のサインが続くようになった。後半は支援がなくても投げることがほとんどなくなった。始めは音でのフィードバックが強いミルク缶を使用し、

後半は自己刺激にとどまらないように、中が見える半透明のプラスチック容器に変更。プットインの容器をのぞいて中に入った積み木を確認する様子がみられるようになった。

④指先操作が向上

ツリーチャームは両端のバーを数本まとめて握る状態から、遅延模倣で指先で鳴らす様子がみられるようになった。また前述のプットインでは、セラピスト介助での手首で入れる状態から、うまく入らない時に自分で指先を使って入れる姿が自然と見られるようになった。

2 クール目

①伴奏に参加

始まりのあいさつ（固定曲）は、セラピストがコードを押さえ、A 児が弦を弾く形での伴奏スタイルが定番となった。弾くときは視線が逸れていることが多かったが、後半はギターに視線を向けられる。

②他者との関わり遊び

カバサの活動中に A 児が笑って逃げ出したところから追いかけてこが始まり、止まったタイミグでカバサを体当てる遊びになる。他の活動でも追いかけてこを楽しむ様子が見られるようになった。

③視覚での受容増加

パネルシアターは A 児の好みの曲を使用すると、視線は別方向に移ることはあるものの、視点の基点はパネルとなっている様子であった。また最後まで離席せずにいることができ、曲の最後にはセラピストと視線が合う。プットインでは、クール1では固有感覚刺激優位であったが、次第に積み木や差し込み穴を見ながら入れられることが増えた。

④日常動作での終点理解

1つの活動中だけでなく、連続して椅子に座っている時間が長くなった。活動中に立ち上がっても自分の意志で椅子に戻ることができている。また帰る際には、履いていたスリッパを下駄箱に戻す様子もみられるようになった。

4 考察

以上の結果から、以下のことが考えられる。

- I 層感覚運動水準における初期感覚刺激の多用が、運動表出や終点理解の促進に有効であった。
- カバサやブランケットブランコなどの前庭覚・固有覚刺激は快反応を引き出し、他者との関わりを伴う遊びの成立を助けた。
- プットインなどの教材を通して、手の操作能力や感覚と運動の協応性が向上した。
- 子どもの好きな曲を使用することで活動への積極性や集中力が向上した。
- セッションの間隔が1か月以上開いた時期は活動への集中度や積極性の低下がみられたことから、定期的なセッションは集中力や積極性に影響し、1か月以上の間隔は空間の再認識や関係の再構築の必要性が示唆された。

5 結論

本事例から、音楽療法における初期感覚刺激の活用と終点理解の提示が、感覚と運動の高次化や「もう一回」や「終わり」といった意思表示の向上に有効であることが示唆された。また、定期的な実施と活動環境のシンプル化が重要である。今後は、より定期的なセッション計画と環境調整を行い、感覚と運動の高次化を意図した支援を継続していきたい。

本報告に関する利益相反はない。

文献

- [1]宇佐川浩：障害児の発達臨床 I 感覚と運動の高次化からみた子ども理解. 学苑社. 2012. p90
- [2]池畑美恵子：感覚と運動の高次化理論からみた発達支援の展開—子どもを見る眼・発達を整理する視点. 学苑社. 2020. P37

